

卷頭言

至極当然のことなのに、その実行が至極困難だ
という例がかなりある。数学教育の現代化など、さしず
めその好例といえるかもしれない。東北の各地に、
現代化をめざす数学教育の真摯な実践があることは評
価されよう。しかし、これがまさしく、現代化のたしかな歩み
だという確信は、一体どこから生ずるのか。

こう考えると、本学会の担つていさ仕事の意味がズシツと
こたえる。年報一号、二号の巻頭言も、この重荷をかまかた
担つてゆこう、そのために勉強してゆこうという、率直な提案
だと読みとれる。

きこ小学校から大学までの数学教材が、現代化の立場から
よく吟味され、周到な計画のもとに配列されても、その配列が、
数学の発達史と、必ずしも同じ順序を持たぬことは明白であらう。
このことは数学教育でどう扱われるのか。

新しい知識や技術を身につけることは、現代人として必要である。
実用のためである。同時に、これらがどのような過程で、人類の共
有財産になったかを知ることも必要である。教養のためである。
創見は両者を兼ね備えたところに生ずるのではない。

「現代化」にここまで極う中の広さが欲しいと思うこの頃
である。

(千喜良)